

宇都宮市内の教育機関を対象とした食育の実態調査 (食育とライフサイクル思考を組み合わせた教育プログラム開発に向けて)

事業代表者 農学部・准教授・菱沼 竜男

構 成 員 教育学部・准教授・大森 玲子

1. 事業の目的・意義

現在、環境についての正しい理解を深めるとともに、責任を持って環境を守るための行動がとれることを大きな目標として、学校教育における「環境教育」が進められている。さらに、環境負荷低減に向けた消費行動が注目される中で、「作る」、「使う」、「捨てる」の一連の流れを通して、環境負荷を包括的に考える「ライフサイクル思考（LC思考）」教育の重要性が認識されている。

これまでに、環境教育は、身近な生活習慣と社会との関わり方の理解や自然環境、伝統、文化などの保護など、様々な内容について地域的な要素を取り入れたプログラムが取り組まれてきた。一方で、環境問題の捉え方である「LC思考」の理解や気づきに関わる教育プログラムの開発は進んでいない状況である。

私たちは、消費行動の中でも身近で実感しやすい「食」を取り上げて「LC思考を理解する食育プログラムの開発研究」に取り組んできた。本事業では、家庭科教育と食育の中でLC思考の理解をねらう教育プログラムの開発と展開に関する地域的課題を整理することを目的として、これまでに私たちが取り組んできた「LC思考を理解する食育プログラム」を再評価するとともに、宇都宮市内の小学校と中学校を対象としたアンケート調査を実施した。

2. 研究方法（又は事業内容）

(1) LC思考を含んだ食育プログラムの再評価

私たちが開発、実施したLC思考を取り入れた教育プログラムである調理体験型の食育プログラム（平成26年度）に関して、参加児童（23名）から回収したアンケート票の再評価を行った。この作業は、回収したアンケート票から実施したプ

ログラムに対する児童の感想を詳細に把握するために行った。

このプログラムは、小学校高学年を対象とした90分（導入15分、講義30分、実験30分、まとめ15分）から構成される内容とした。また、LC思考に触れる初期の教育段階と位置付けて、直感的に理解しやすい指標と考えられたフードマイレージを参考にしてプログラムを立案した。具体的には、児童4～5名で1グループをつくり一人1枚のピザ作りを体験し、ピザのトッピング食材について生産地や輸送距離、輸送手段、燃料消費量などを実験的に確認していく内容とした。

(2) 宇都宮市内の小・中学校へのアンケート調査

本アンケート調査は、小・中学校の家庭科教育および食育における環境教育、LC思考に関連した教育の取り組み状況を把握することを目的として行った。

調査票は、宇都宮市内の公立小学校（69校）、公立中学校（27校）（ただし、宇都宮大学教育学部附属小学校、中学校を含む）に郵送で配布し、FAXで回答する形式とした。特に、本調査の回答対象を各校の家庭科主任の担当教諭と栄養士として配置されている職員と定め、調査票の質問内容も対象者ごとに作成した。

3. 事業の進捗状況

(1) LC思考を含んだ食育プログラムの再評価

平成26年度に実施した調理体験型の食育プログラムのアンケート票の再評価では、特に自由記入欄に記載された内容を取り上げて分析を行った。

(2) 宇都宮市内の小・中学校へのアンケート調査

宇都宮市内の公立小学校、中学校に対するアンケート調査は、平成28年2月19日から3月4日にかけて実施した。現在、アンケート調査票の

郵送作業が終了し、各校からの返答を待っている段階である。今後、アンケート調査票の回収を進め、3月中旬から分析作業に入る予定である。

4. 事業の成果

(1) LC思考を含んだ食育プログラムの再評価

調理体験型の食育プログラムのアンケート調査結果として、本プログラムに対する興味関心は高く、内容も分かりやすいという回答が多くみられた。具体的な理由として、実験が楽しかったと回答した児童が半数程度を占めた。また、生産地や輸送距離、輸送手段が理解できたとの回答が3件、燃料消費量の把握と生産地と燃料消費量の差を理由に挙げた児童が7名、食材購入の際のものの考え方を理由に挙げた児童が1名であった(図1)。自由記入欄では「ほかの食べ物がどこから来ているのか」、「ほかの食べ物の燃料消費量を調べたい」、「燃料の節約方法が知りたい」などの意見が記載されていた。

アンケートの再評価より、本プログラムを通して約半数の児童らが食材の産地の違い、食材の裏側にある輸送やそこでの燃料消費量の違いを意識できたと考えられた。本プログラムが、児童の食材の生産側に注意と関心を引く内容であったと推察された。特に、「実験が楽しかった」とする回答数が多かったことは、プログラムの中に実験を取り組むことによって児童らの興味を引き出し、理解を促すことにつながると考えられた。

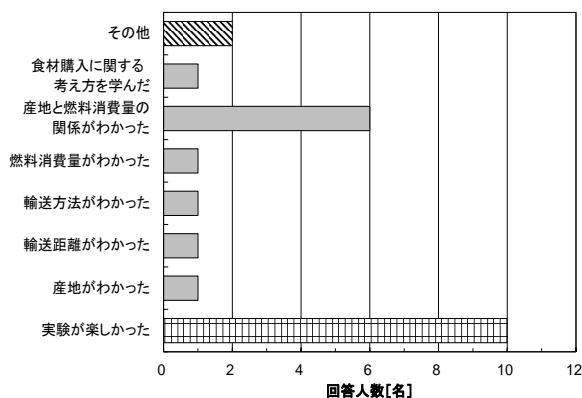


図1. 食育プログラムのアンケート再評価 (n=20)

(2) 宇都宮市内の小・中学校へのアンケート調査

現在、本アンケート調査の実施中であり、詳細な分析は今後の作業である。

暫定的ではあるが、現段階で得られた小学校、中学校からの回答(18校)を分析した。小学校の家庭科主任教員と栄養士(9校、17名)におけるLC思考の認知度合いについて、「聞いたことがある」と「全く知らない」の回答数が11件、「なんとなく知っている」が6件であった。一方で、中学校(9校、12名)では、9名の方が「よく知っている」、「なんとなく知っている」と回答していた。また、小学校、中学校における家庭科教育、食育へのLC思考導入の必要性に関しては、「どちらかといえば必要」という回答数が多かった。小学校、中学校における家庭科教育や食育に、LC思考の理解に関する内容を取り込むことについては、「可能だが容易ではない」、「困難である」と回答した方がほとんどであったが、「難なく取り込める」と回答した方もあった。

5. 今後の展望

今後、小学校、中学校の違いや家庭科主任と栄養士の違いなど、教育段階や内容の違いを含めて分析を行う。LC思考に関して、宇都宮市の小、中学校における家庭科主任と栄養士の意識を整理するとともに、LC思考を取り組んだ教育プログラムの開発をどのように進めるべきかを検討する必要がある。また、教育段階別にLC思考を取り込んだ教育プログラムを作成し、小、中学校の教員とともに試行的な教育プログラムの実施までつなげていくことが必要である。

謝辞

アンケート調査にご協力いただきました宇都宮市内の公立小学校、中学校の皆様にご感謝申し上げます。また、アンケート調査票の作成にご指導いただいた宇都宮市教育委員会学校健康課の皆様にお礼申し上げます。